

### 市史の窓 No.87



梅づけの季節です。店頭 現勢調査簿』には、梅林につ  
に大粒、小粒の青梅がなら いて「今ヲ去ル百七十百八  
べられています。 十年前ノ植栽ニシテ」と記載  
青谷の梅林と梅の生産に されていますが、梅の歴史は、  
関しては、『青谷村誌』(昭 有名なわりに必ずしも明らか  
和十六年刊行)に幕末ごろ にされています。  
盛んになったこと、「鳥梅」 中区有文書のうちに、この  
として大阪に出荷されてい 梅に関する三、四の文書が  
たことなどが記されていま あります。以前に市民歴史講  
すが、『山城綴喜郡誌』(明 座でふれたことがあります  
治四十一年刊)では、とく 「市史の窓」ではとりあげて  
に書かれていません。 いまないので、季節にちなん  
明治三十九年の「青谷村 で紹介しておきましょう。

## 干梅の共同出荷

幕末の嘉永二(一八四九) 一石につき二両あて、合計二  
年六月の「干梅勘定覚帳」で 百三十四石分、四百六十八両  
は、この年、干梅を共同出荷 を前受しています。各人には  
したことが知られます。 共同出荷費用として、一石あ  
「今年梅作は格別不作で、 て銀二匁六分二厘を差引いて  
値段もよくないので、年貢の 支払っています。出荷量は一  
上納にもさしつかえる有様で 人最少一石より最多二十一石  
ある。そこで村中が相談し、 までにわたって、全部で五十  
干梅を一括して入札するなら 人、合計二百三十四石でした。  
ば、値段相応に売りさばきも 実際の売値段は一石につき銀  
よくなるかと考え、役人中の承 百四十三匁であったとされて  
諾も得て、六月二十一日に入 います。共同出荷費用の内訳  
札)しました。しかし、必ず も知ることができません。  
しもよい値段がつかなかった 幕末のころ、中村で、この  
ようですが、伏見渡して共同 ように干梅を伏見に共同出荷  
出荷しています。 していることを示す史料は大  
伏見の丸尾三右衛門より、 変珍らしいものといえましょ

この年の生産額は梨一万 六千四百七十六貫、千九百 七十七円、茶(煎・玉・荒) 一万三千六百三十三円、農 産物全体で六万三千六百二 十四円でした。米麦につい て茶、梨があり、梅はそれ についているわけです。  
昭和十四年には千三百五 十石、二万二千五百円の生 産額がわかります。